

看護学生が実習グループメンバーとの関係性を構築していくプロセス

佐原玉恵* 細川つや子**

*徳島文理大学保健福祉学部看護学科 **四條畷学園大学看護学部

The Process of Building Relationships among Members of a Nursing Practicum Group

Tamae Sahara* Tsuyako Hosokawa**

* Department of Nursing, Faculty of Health and Welfare, Tokushima Bunri University

** Faculty of Nursing, Shijonawate Gakuen University

〈Abstract〉

Objective: The purpose of this study was to clarify the process of building relationships among members of a nursing practicum group.

Method: The study participants consisted of nursing students from the 4th grade. Semi-structured interviews were conducted with 11 students who had completed their clinical nursing practicum. The data were analyzed using the Modified Grounded Theory Approach (M-GTA).

Results: The core category representing the process of building relationships among nursing practicum group members is “acquire my location within the group.” Students began building relationships by “approach the group members for get along,” after which they “grasp members characteristic” and “accept the members’ roles.” Students who performed their role as expected by members “help each other’s and become to best friends.” On the other hand, they caring for other member severe and tired be led to “A bad relationship with members.”

Discussion: The process of building relationships among nursing practicum group members is a four-step process. When teachers support a training group, this four-step process can help the training group members build good relationships early on.

Conclusion: The process by which nursing practicum students build relationships with their group members is the process through which they “acquire my location within the group” by caring for members appropriately and performing their expected roles.

〈要旨〉

研究目的：看護学生が実習グループメンバーと関係性を構築していくプロセスを明らかにし、実習指導をする際の示唆を得る。

方法：臨地実習を終了した看護系大学の4年次の学生11名に半構造的インタビューを行い、修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチを用いて分析をした。

結果：看護学生が実習グループメンバーと関係性を構築していくプロセスを表すコアカテゴリーとして【グループ内での自分の居場所を獲得する】が抽出された。このプロセスは、『メンバーとの距離を縮める』ことから始まり『メンバーの特徴を知る』ことで『メンバーの役割を受け入れる』に至った。学生は自分の役割を果たし、信頼関係を築き、『メンバーが助け合う仲間になる』ことで良好な関係性を構築していた。一方、メンバーへの過剰な気づかいが負担になることで『メンバーとの嫌な関係』に至る場合もあった。

考察：看護学生が実習グループメンバーと関係性を構築していくプロセスは4段階のプロセスあることが明らかになった。教員が実習グループの支援を行う場合4段階のプロセスを活用することで、実習グループメンバーが早期に良好な関係性を築くことができると考えられた。

結論：看護学生が実習グループメンバーと関係性を構築していくプロセスは、学生がメンバーへの適切な気

づかいをすることと自分の役割を期待通り果たすことで【グループ内での自分の居場所を獲得する】プロセスであった。

キーワード	
看護学実習	nursing practicum
看護学生	nursing students
実習グループ	practicum group
関係性	relationships
M-GTA	M-GTA

I. はじめに

看護学実習は、学生・指導者・クライアントの3者を中心に複雑に関係しあうことを必然とする授業であり¹⁾、看護学生（以下、学生と表記）は、臨地実習の場で様々な対人関係を築いている。そのため臨地実習中における学生のストレスは非常に大きいといわれている²⁾。

先行研究では、実習グループにおける肯定的な体験は、課題達成の意欲を高め、安心感を得るものになっているが³⁾、実習グループに対して、否定的な認識を持っている場合は、協力、助け合いができず、意欲、達成感を得ることは難しいと報告されている⁴⁾。また、メンバー間に問題が発生後、メンバー変更ができない場合は、苦手なメンバーとの関係性の修復が困難なため実習に影響があるといわれている⁵⁾。

しかし、学生が互いの経験を共有し、助け合うことで学生の専門職業人としての発達を高め⁶⁾、学生のピアグループの相互作用においても助け合うことで、情報、知識、アイデア、個人的な相談をシェアしていたと報告されている⁷⁾。学生間の相互作用は、支える、知識情報のシェア、努力、勇気などを互いに共感することであり⁸⁾、これらは学生の成長発達、学習意欲の源になっていると報告されている⁹⁾。

以上より、学生にとって長期間共に過ごす実習グループメンバーとの関係は、実習への意欲、達成感に大きな影響があるのではないかと考えた。

つまり、実習グループメンバーと良好な関係を築き、肯定的な体験をすることで、学生の実習への意欲が刺激され達成感を得るのではないかと考える。そのためには、実習開始早期にグループメンバーとの良好な関係性を構築する必要がある。しかし、先

行研究では学生がグループメンバーとどのように関係性を構築したのかを検討しているものは見当たらなかった。学生が早期に実習グループメンバーと良好な関係性を構築することができれば、実習での学びが充実し、ひいては学生生活全般に良い影響があるのではないかと考える。そこで本研究では、看護学生が実習グループメンバーとの関係性を構築していくプロセスを明らかに、期に良好な関係を築くための支援について示唆を得ることを目的とした。

II. 方法

1. 研究参加者

A 大学看護学科4年次の学生で、2014年度および2015年度に3年次の領域実習（慢性、老年、母性、小児、精神、急性期）を終了した学生である。

2. 調査方法

研究参加者の募集方法は、大学内の掲示板を利用し、研究の目的、研究協力内容、研究者の連絡先を明示した。学生から研究参加についての連絡があれば、日時と場所を設定し、研究協力内容について文書と口頭で説明した。データ収集方法は、インタビューガイドを使用した半構造的面接法である。インタビュー内容は、実習中の実習グループメンバーとの対人関係に関連した体験について、「実習中にどのようにメンバーと関係を構築していったか」「メンバーとの印象深い体験は何か」とした。インタビューはプライバシーが守られる個室で行われた。データ収集期間は、2014年6月～11月、2015年7月～10月であった。

3. 分析方法

研究デザインは、実習グループの内での人間関係に焦点を置いていることから、社会的相互作用¹⁰⁾

に関係しているためグラウンデッド・セオリー・アプローチとした。また、学生がメンバーとの関係を構築していったプロセスに焦点を当てていることから、修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチ（以下 M-GTA とする）を用いた¹¹⁾。分析焦点者を「看護学生」とし、分析テーマを「看護学生が実習グループメンバーと関係性を構築していくプロセス」と設定した。まず、逐語録の中から、実習グループメンバーと関係性が築かれるプロセスにおいて、学生が体験した出来事や場面、それに伴って生じた行為の箇所に注目し、1つのヴァリエーションとし、他の類似具体例も説明できる説明概念を生成した。分析ワークシートを作成し、概念名、定義、最初の具体例を記入した。新たな概念が生成されれば、分析ワークシートを作成した。生成した概念は完成度を挙げるために対極例についての比較の観点からデータを見ていき、理論的メモ欄に記入した。次に生成した概念と他の概念との関係を検討し、データからの解釈に過不足がないことを確認したうえで理論的に飽和したと判断した。複数の概念の関係からなるカテゴリーを生成し、カテゴリー相互の関係から分析結果をまとめ、その概要をストーリーラインとして文章化し、結果図として示した。分析を遂行するにあたり、まず、主となる研究者がワークシートを作成し、その後、二者間で概念名とヴァリエーションの整合性、また理論メモから対極例について検討し、概念の精緻化に努めた。

4. 用語の定義

1) 実習グループ：臨地実習中編成されている数名の学生で構成されているグループ

2) 実習グループ内での体験：実習グループ内の学生間の関わりから感じたこと、考えたこと、行動したこと。

Ⅲ. 倫理的配慮

本研究は徳島文理大学の研究倫理審査委員会の承認を受けている（番号 26-1）。研究参加については自由意思に基づき、参加を拒否した場合でも不利益をこうむることはないこと、一度同意した後に撤回することも可能であることを説明文書と口頭で伝えた。

Ⅳ. 結果

1. 研究参加者の概要

研究参加者は4年次の看護学生11名であった。11名はすべて女子学生であり年齢は20歳代、実習グループ人数は4名～6名であった。インタビューは1人1回であり、インタビュー時間は平均38.5分であった（表1）。

分析の結果、13個の概念から5個のカテゴリーと1つのコアカテゴリーが生成された（表2）。コアカテゴリーは【】、カテゴリーは『』、概念は〈〉、ヴァリエーションは“ ”で示し、文脈を理解するために必要な場合は研究者が（ ）を用いて内容の補足をした。以下にストーリーラインを説明する。

表 1 研究参加者の背景

事例	年齢	データ収集年度	性別	グループサイズ（人数）	インタビュー時間（分）
1	20歳代	2014	女性	4-6	47
2	20歳代	2014	女性	4-6	32
3	20歳代	2014	女性	4-6	27
4	20歳代	2014	女性	4-6	37
5	20歳代	2014	女性	4-6	25
6	20歳代	2014	女性	4-6	45
7	20歳代	2014	女性	4-6	46
8	20歳代	2015	女性	4-6	46
9	20歳代	2015	女性	4-6	37
10	20歳代	2015	女性	4-6	35
11	20歳代	2015	女性	4-6	47

表2. コアカテゴリー、カテゴリー、概念、定義、ヴァリエーション

コアカテゴリー	カテゴリー	概念	定義（上段）とヴァリエーション（下段）
グループ内での自分の居場所を獲得する	メンバーとの距離を縮める	メンバーと親しくなるきっかけを手探りでさがす	互いのことをよく知らない学生と実習に行くことが不安なため、話のとっかかりを見つけて積極的に相手に近づいていく 実習に行く前にとりあえず仲良くなろうって感じで連絡とり合ったり（学生3）初めて一緒にグループになりましたっていう子とかは、ちょっとずつ距離詰めようかなってなって（学生1）、はじめは今まで話したことある子と固まる感じだったんですけど、自分の患者さんこういう人なんよって話をしたら、なんかみんなが食いつく、食いつくっていかグループの子が受け持っている患者さんにも興味がわくん、なんかそれで、話していく（学生2）最初はグループの時に仲いい子とバラバラになって不安があって、わたしBクラスなんですけど。Aクラスの子とあんまり面識がなくて、結構最初のコミュニケーションとかは困ったかなと思います。最初は実習のことから話していったって、どんどん相手のこと知って、そしたらどんどん深くなっていく感じですかね、さぐりさぐり、というか（学生10）
		いつもの自分を出さないように気をつける	メンバーと良い関係を築くために普段のような自由な言動をしないように気をつける 方言とかが出てしまう時があるんですけど、その方言に対しても違う県外の子からしたら上から言ってるみたいな感じのこともあるので、いろいろ気を付けていました。（学生4）なんとなく…言い過ぎず…言わなさすぎずというか、自分自身が結構バツサリ切っちゃうところがあるので、あんまり言わんようにしてた…（学生1）だから地雷とか踏まないようにコミュニケーションの取り方とかは気をつけました。（学生10）
	メンバーの特徴を知る	メンバーへの気づかい	メンバーの特徴をみつけ、それぞれのメンバーに合わせた対応をする ちょっと体調悪そうだなというのがわかるんで、ちょっと顔が白い感じの子とかには、声掛けはしてました。「今日ご飯食べた？とか」っていうのは気を付けてたんですけど（学生4）別のグループから入ってきた子には特になんか、アウェイな気持ちになってると思うんで、結構話しかけたりとかしてて、なんか雰囲気作りはけっこうがんばっているっていか雰囲気崩さないように、（学生3）せっかく一緒になったメンバーやから、みんなの意見を聞きながら一緒に頑張っていく。一人だけほっとくんじゃなくてみんなで実習を乗り切っていくっていうんを心がけて（学生8）
		メンバーとの関係が自分の発言に影響する	話し合うメンバーとの関係によって自分の発言の量や内容が影響を受ける 自分はこういうことが聞きたいのに、でもグループの子から返ってくる答えは、そういう話にならないというか、聞きたいことの答えにはならなくて、違う話のほうにそれで行ったりする。（学生1）それぞれ感じたことが違うんで、みんなそれぞれ違う、こういう意見もあるんだとか私もこうしとったらよかったとか、こうやって看護師さんに言ったらよかったんやみたいな感じで、みんながいろいろ反省会の時に言えるから、それが次の実習に生かされる、（学生8）みんなで言い合って、みんなで調べたりしてじゃ疑問に思ってるんやけどどう思う？っていうみんな自分の持つてくる知識とか調べたりして答えに行きつく、行きつかない時もあるんですけど調べたりしてました。みんなちゃんと言い合って意見、記録とか司会も順番にして、結構円滑に進んでいた、やらない子とかはいなかった。（学生10）もう、いらぬことはしゃべらない、二人が進行できていればそれでいい、いい自分が違うって思っても聞かれなかったら、いわない、聞かれたらいうけど、3人のうち一人の子が結構きついというか、ばさばさ言うかんじやったんで、きついというかこわいというか、そういうしゃべり方するんで（学生11）
	メンバーの役割を受け入れる	メンバーの役割	実習するなかで自分にとってのメンバーの役割を割り当てる 自分がいけなかったときに同じグループの子が、今から清拭いくんやけど、一緒に看護師さんも学生二人ついてきていいよって言うから一緒にいこうって言うてくれて助かりました（学生2）結構、記録がゆっくりな子とか、スラスラかけちゃう子なんかいたんで、できる子がゆっくりの子を記録の仕方とか、教えてあげる感じとか、してました。私は横で見ているだけだったんですけど（学生3）わりとリーダー中心にサブもしっかりしとって、さらに発言できることがあって、苦手な子が何人かおる、みたいな形で、だんだん苦手な子も、わからんから「これわからんのやけど」っていうからじゃあこうしたらどうかって、わかる子が答える。…そんなんで、こう、盛り上がっていくというか…リーダー、もともとリーダー気質の子っているじゃないですか、あーゆう人が、ムードメーカー的な子がいると、グループワークがスムーズに進むんだりするんかな（学生1）先生との情報共有、看護師さんとの情報共有はリーダーさんで、自分たちの記録とか、援助の悩みとかは…できる子に聞く（学生3）
		優秀な学生に助けられる安心感	優秀な学生を探し、実習中に困らないように助けてもらえることで安心する 〇〇さんに聞いたときにちゃんと答えが返ってくるっていうのがだんだんわかり始めて、でも最初はやっぱり〇〇さんが、たくさん本とか持って来とったり、それで、（わからないところを）聞いてみたら答えが返ってきて、この子めっちゃできるんやな、みたいになって、その子に聞くことが多くなって（学生5）実習のメンバーが発表されたときに、友人間でこんなメンバーなんだけどっていう、なんか話し合いじゃないですけど「あ、いい感じじゃん…」っていう。「この子絶対賢いから大丈夫…」みたいな（学生5）一回一緒になってすごい頼れる人だったので一緒になったら「もう、よっしゃ！！」これで安心して2週間過ごせるっていう…（学生3）

コアカテゴリー	カテゴリー	概念	定義（上段）とヴァリエーション（下段）
グループ内での自分の居場所を獲得する	メンバーが助け合う仲間になる	つらさを共有する	メンバーに実習中の苦悩を話し気が楽になる 客観的に見て意見をくれたんで、なんか、自分もそういう風に聞いて、ちょっと気が楽になったりもした。（学生6）なんか記録とかもなんかやっぱ、みんながつらいじゃないですか、自分だけじゃなくて、そのつらさもみんなで分かり合える同じ悩みをもっとるみたいな、感じで、話しやすい関係（学生2）
		協力して苦しい場面を切りぬける	メンバーと助け合いながら実習の困難な場面对処する 構音障害のある患者さんで聞き取りにくいとかもあったんで、やっぱりもう一人学生がおってくれたらどっちかが理解できるから（学生8）自分の言いたいことが言えんってなったら担当看護師さんが一緒の子にちょっと一緒に来てもらって、一人じゃちょっと無理ってなったらじゃあ一緒に行こうかみたいな（学生8）自分が受け持った患者さんとか、友達が受け持った患者さんでなんか、それぞれわからんことってやっぱり出てくるんですよね、. どうしたらいいんだろうとかこういうときって看護技術でどうしてあげたらいいのかなとか、声掛けってどんな感じで言ってあげたらいいんだろうなっていうのを全部なんか休み時間とか使って、あたしたちのグループだとなんかご飯食べながらとかでもいろいろ相談乗ってもらったりとかして、すごい充実した実習ができました（学生4）。受け持った患者さんがあまりしゃべらない人で、その子もどう接したらいいかわからないというのがあって、じゃあ私も行ってちょっと人数が多い方がしゃべりやすいかなって思ってたって患者さんと友達と私の3人でいて、ちょっとしゃべれたりとかしたんで、それはよかったんかなって思いました。（学生6）なるべくみんなでみんなで乗り切っていく、だれかどうかなったら困るし、せっかくここまでがんばってきたんやから～そしたらグループのみんなが助けてあげんと、ってなって（学生8）
		認めあう関係になる	グループメンバーが互いの存在を必要だと感じ、認め合うこと いいところはけっこう褒めてくれるっていうのもあったので…たとえば、カンファレンスとかで、自分が言ったことを「あ、それいいね、自分もやってみようかな…」みたいな言い方で言ってくれるので、うれしかった。（学生4）私もいいことは「それいいね」って言って自分も取り入れていくようにはしていました。反省会の中でも患者さんのテーマを挙げたりとか、それぞれ感じたことが違うんで、同じ病棟に行っても私はこう感じたとか、みんなそれぞれ違うんで、こういう意見もあるんだとか、私もこうしとったらよかったとか、こうやって看護師さんに言ったらよかったんだ、みたいな感じで、こう、みんながいろいろ反省会の時に言えるから、それが次の実習に生かされる（学生2）
	メンバーとの嫌な関係	批判を受け入れる関係になる	メンバーが互いに尊重しあうことで、不足部分や修正点を指摘されても素直に聞き入れることができる 注意してくれるので助かりました。グループメンバーで注意できるってすごいいいことだと思うんですよ（学生8）結構みんな意見を言える子、が多かったのもあるんですね、いろいろ言って返してくれる、あと、言い方とかもありますけど「もうちょっとここ直した方がいいよ」とかもみんなそれぞれでちゃんとと言える。（お互いの悪いところが指摘しあえる）なんかこんなこと言ったらあれかなっていうんじゃないくて、ちゃんと直してほしいと思っているからみんなが…（学生8）グループの中で男の子がいたんですけどその子が結構、「○○ちゃん今の言い方はよくなかったよ。」みたいに注意してくれることもあったので…助かったりはしていました。（学生4）
		メンバーの機嫌を損ねない	影響力のあるメンバーの機嫌を損ねると実習に影響するので気を付けて行動していたということ 仲が悪くなったら後々何でも言いづらいから電子カルテ占領されていてもその子が納得するように話しかけて5分程度代わってもらう（学生11）何を考えているのかわからなくて気を遣って話しかけても反応が薄くていややったんですけど気を遣ってました。実習メンバーが最後まで一緒なのはわかっていたので。メンバー表見たら、だからけんかしたらいかんし、とにかく、仲良くならな、喧嘩したんではいかなので、（学生11）なんかもうホンマに雰囲気壊れるいやヤシ、. みんなの前ではあんまり注意せん人、というか、なんか真面目ないイメージと思ってくれとう子もいるとは思うんですけど、なんか、あんまり「静かにせないかんでえ」とか、あんまりたぶん元から言わんし、なんか、うん、ちょっとなんか怖かったっていうか（学生9）
		メンバーに傷つけられる	メンバーの言葉が自分にとってはきつく聞こえ、傷ついたこと アセスメントするのが苦手なんで、そのアセスメントをグループのメンバーに見てもらおうと思って見せたときに、「えっ、これアセスメントじゃないよ、SデータとOデータだけやん」みたいな、上から言われるっていうのがちょっと、えーみたいなかんじでした。また相談しにくいていう感じになってしまいます（学生4）
		グループ内での孤立	メンバーとの関係が悪く場面によっては孤立するため実習に支障をきたすこと たまたまグループメンバーが3名で自分ともう一人の学生が仲が悪いことがあったんですよ、自分とその学生は嫌っていうのが顔にも出るちゃうんですよ、残りの一人は優しいから、その子にちゃんと接してあげてるんですよ、でシート交換になったらその二人が組むじゃないですか。そういう時自分は一人孤立してしまってためっちゃ困りました（学生7）自分はこの学生とはしゃべれるけど、もう一人の学生とはしゃべれない。という時があって、別に一人が嫌とかじゃなくて、ただ、（実習する上で）聞きたいことが聞けなくて困った（学生7）

2. ストーリーライン

学生は実習グループメンバーと関係性を構築するために、〈いつもの自分を出さないように気をつける〉ことで〈メンバーと親しくなるきっかけを手探りでさがす〉ことを繰り返すうちに『メンバーとの距離を縮める』ことになった。

『メンバーとの距離を縮める』ことができると、この関係を継続しようと、相手の様子を伺い、〈メンバーへの気づかい〉をするようになる。メンバーとの関係を継続するための気づかいをすることで次第に〈メンバーとの関係が自分の発言に影響する〉ことに気づいた。この行為を繰り返す中で『メンバーの特徴を知る』ことになった。一方、『メンバーの特徴を知る』段階で、メンバーとの関係が自分に影響することが負担になる場合もある。〈メンバーに傷つけられる〉ことを恐れ、〈メンバーの機嫌を損ねない〉ように行動するが、〈グループ内での孤立〉になる場合もある。ひいては、『メンバーとの嫌な関係』に至ってしまう。

『メンバーの特徴を知る』と、メンバーと自分が互いにどういう役割を果たすのか見極め、自分なりに〈メンバーの役割〉を割り当てていった。それと同時にグループ内での自分の立ち位置も確認していた。その中で〈優秀な学生に助けてもらえる安心感〉を得た。互いに期待された役割を果たし、相手に信頼を置くことで『メンバーの役割を受け入れる』ことになる。

メンバーと〈つらさを共有する〉ことができれば〈協力して苦しい場面を切り抜ける〉ことができる。そうする中で信頼関係が生まれ〈認め合う関係になる〉。互いを認め合うことで相手を尊重し、〈批判を受け入れる関係になる〉に至り、『メンバーが助け合う仲間になる』。これは【グループ内での自分の居場所を獲得する】プロセスであった(図1)。

3. カテゴリーと概念

プロセスを構成する主なカテゴリーと概念について説明をした後、コアカテゴリーの生成について述べる。

1) 『メンバーとの距離を縮める』

学生は互いのことをよく知らないメンバーと実習に行くことが不安なため、〈いつもの自分を出さな

いように気をつける〉ことで〈メンバーと親しくなるきっかけを手探りでさがし〉、相手に近づいていった。

“仲いい子とバラバラになって不安で、最初は実習のことから話していった、相手のこと知って、そしたらどんどん深くなっていく感じですかね。さぐりさぐりというか”(学生10)のようにメンバーと話ができるようになると、良い関係を築くために、〈いつもの自分を出さないように気をつける〉となった。実際には“方言が出てしまう時があるので、県外の子は、きつく感じることもあるので気をつけていました。”(学生4)“言い過ぎず言わなさすぎずというか、あんまり言わんようにしていた。”(学生1)などがあつた。また、“自分の患者さんのことを話したら、みんな食いつく”(学生2)のように話のきっかけを探りながら親しくなるきっかけをさがしていた。また、実習前からの行動としては、“実習に行く前にとりあえず仲良くなろうって感じで連絡を取り合ったり”(学生3)することで〈メンバーと親しくなるきっかけを手探りでさがす〉ことをし、『メンバーとの距離を縮める』に至った。

2) 『メンバーの特徴を知る』

メンバーの言動からそれぞれの特徴を見つけ、気になる学生がいる場合は、〈メンバーへの気づかい〉をしていた。

実際には“病棟が変わると、別のグループから入ってきた子は、アウエイな気持ち(別のグループから来て不安な気持ち)になってると思うんで話しかけたりして、雰囲気崩さないように”(学生3)などがあつた。しかし、特徴の強いメンバーへの気づかいをしすぎると、〈メンバーとの関係が自分の発言に影響する〉となり、『メンバーの特徴を知る』という状況になっていった。例えば学生11は“もう、いらぬことはしゃべらない(メンバー3名の内の)二人が(グループワークの)進行ができていればそれでもういいし、3人のうち1人の子が結構きついというか、ばさばさ言う感じだったんでこわいというか”(学生11)と語り、メンバーの強い特徴を知ることとなった。

3) 『メンバーの役割を受け入れる』

実習が進む中で、学生はグループメンバーの特徴

【グループ内での自分の居場所を獲得する】

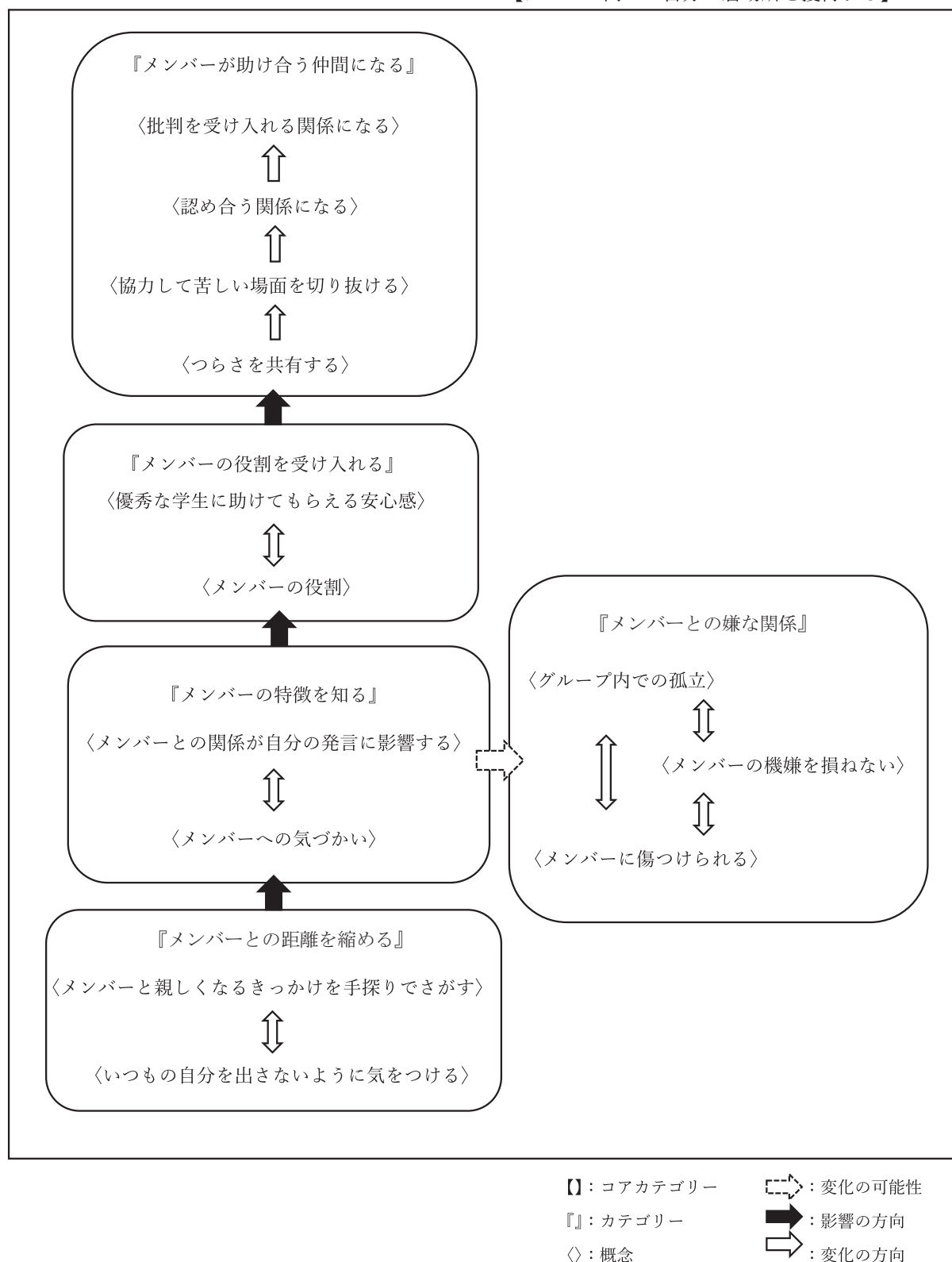


図1. 【グループ内での自分の居場所を獲得する】プロセス

を基に〈メンバーの役割〉を割り当てていった。それと同時に、メンバー間に序列ができ、自分自身の役割を理解し、『メンバーの役割を受け入れる』という状況である。

学生3からは“結構、記録がゆっくりな子とか、スラスラかけちゃう子がいたんで、できる子がゆっくりの子に記録の仕方とか、教えてあげる感じでした。”(学生3)との語りがあった。また学生1は、グループワークが活発になるためには、メンバー構成に序列があると考え、以下のように語っていた。“リーダー中心にサブもしっかりしてて、さらに発言できる子がいて、苦手な子が何人かおる、みたいな形で、苦手な子も「これわからんのやけど」っていうから、「じゃあこうしたらどうか」って、わかる子が答える。そんな感じで、盛り上がっていくというか”(学生1)

メンバーの役割を割り当ててる中で、優秀な学生を見つけ、〈優秀な学生に助けてもらえる安心感〉を得ることができていた。学生5は、“〇〇さんに聞いたときにちゃんと答えが返ってくるっていうのが、だんだんわかり始めて、この子めっちゃできるんやな、みたいになって、その子に（わからないことを）聞くことが多くなって”(学生5)と語っていた。

4)『メンバーが助け合う仲間になる』

グループメンバーが、互いに相手が期待した役割を果たすことで、実習場で〈協力して苦しい場面を切り抜ける〉ことや〈つらさを共有する〉ことによって、信頼関係が構築され、〈互いを認め合う関係になる〉、そして互いに相手を尊重する態度から〈メンバーからの批判を受け入れる関係〉となり『メンバーが助け合う仲間になる』に至った。

実習の中での困難な場面をメンバー同士で〈協力して苦しい場面を切り抜ける〉ことでその場を対処する方法を見出していた。実際には“(メンバーの受け持ち患者さんが)構音障害のある患者さんで聞き取りにくいことがあったんで、もう一人学生がおってくれたらどっちかが理解できるから(一緒に訪室して会話をした)”(学生2)などの語りがあった。さらに〈つらさを共有する〉ことで、さらにメンバーとの関係は親密になりメンバーが互いの存在を〈認めあう関係になって〉いった。

学生6は“(自分のつらかった体験を聴いてくれた後)客観的な意見をくれたんで、自分もそういう風に言ってもらってちょっと気が楽になったりした。”(学生6)また学生2は、“記録とかも、みんながつらいじゃないですか、そのつらさも分かり合える。”(学生2)他にも“いいところは褒めてくれる、カンファレンスで自分が言ったことを「あ、それいいね、自分もやってみようかな」みたいに言ってくれるのでうれしかった。(学生4)”さらに信頼関係が構築されている状態で、尊重しあい、メンバーが互いに相手の修正点について意見しても素直に〈批判を受け容れる関係になって〉いった。“（自分の意見に)いろいろ言って返してくれる。あと、「もうちょっとここ直した方がいいよ」とかもみんなそれぞれでちゃんと言える。なんかこんなこと言ったらあれかな（気分を害するかな）っていうんじゃないくて、ちゃんと直してほしいと思っているから”(学生2)などの語りがあった。

5)『メンバーとの嫌な関係』

メンバーとの関係性を継続するために、〈メンバーの機嫌を損ねない〉ように自分の意図していない状況を受け入れることで、つらい気持ちになり〈メンバーに傷つけられる〉。また関係性の悪化から〈グループ内での孤立〉となり、『メンバーとの嫌な関係』が築かれている状況である。以下のような語りがあった。

学生11は“電子カルテが1台だし、仲悪くしたら(交代してと)言いづらいから、そこで喧嘩したら次に響くのはわかっていたし、みんな、(その学生に)めっちゃ気を遣ってました”(学生11)と語り、特徴のあるメンバーに過度に気をつかうことに負担に感じ、メンバーとの関係を嫌な関係であると感じていた。また学生4は、“アセスメント(の記録用紙)をグループのメンバーに見せた(助言をもらおうとした)ときに「これアセスメントじゃないよ、データだけやん」って上から言われるっていうのが(つらかった)”(学生4)と語り、メンバーに助けてもらおうとしたが、傷つく体験をしていた。また、学生7は“グループメンバーが3名で、自分と仲の悪い学生が一人いたことがあったんですよ。それでシート交換になったら二人が組むじゃないで

すか。そういう時自分は一人孤立してしまって、めっちゃ困りました”（学生7）など、メンバーの1人と嫌な関係であったため実習中の看護技術で孤立してしまったという状況が生じていた。

6) コアカテゴリー【グループ内での自分の居場所を獲得する】

学生は、実習グループメンバーと良好な関係性を構築するために、手さぐりでメンバーとの距離を縮める中で、いつもの自分を出さないように気をつけながら、メンバーの特徴を知り、互いの役割を受け入れていった。そして、期待した役割を果たすことで、互いの存在を認め、大切に思うことで、助け合う仲間になっていった。これは【グループ内での自分の居場所を獲得する】というプロセスであり、本研究のコアカテゴリーとした。

V. 考察

1. 【グループ内での自分の居場所を獲得する】プロセスについて

本研究により、看護学生の実習グループメンバーとの関係性の構築には4段階からなる【グループ内での自分の居場所を獲得する】プロセスがあると推察された。

グループ内での自分の居場所を獲得するための最初の段階として、『メンバーとの距離を縮める』があり、この段階で初めてのグループメンバーと親しくなるきっかけを作っていた。学生は、実習グループメンバーとの関係を持とうと、今までの自分を引っ込め、新しい行為を作り出す必要に迫られていた。ブルーマーは対人関係理論の中で「個人は状況を把握し、手掛かりを捕まえ、状況に対して自分を適合させるように各種の行為を組み立てていかなくてはならない。」と述べている¹⁰⁾。学生は、自分の状況について判断し、自分を適合させるように行為を組み立てていた。メンバーとの関係を構築するために学生は緊張を強いられる段階であった。

2つ目の段階として、相手からどのような影響を受けるのか見極める段階である。『メンバーの特徴を知る』ために〈メンバーへの気づかい〉をすることは他者を考慮することであり、相手をはっきりと意識し、識別し、判断し、その相手の行為の意味を

判定し、何を考え、何を意図しているのか推測しようとしていることである。そしてこれらは自分の立場を見極め行動に指針を与えることである¹⁰⁾。つまり、メンバーの特徴を見極めていると同時に自分自身の立場を見極めているともいえる。ゆえに特徴の強いメンバーとの関係性を築く場合は、〈メンバーとの関係が自分の発言に影響する〉ことになった。実習グループ内のメンバーの行為はプラスの意味であっても、マイナスの意味であっても学生には大きな影響をおよぼしていた。

3つ目の段階として、メンバーに役割を割り当てる段階であった。メンバーの特徴を知るなかで、互いの立ち位置を確認していた。その段階を経て、学生は自分目線で、〈メンバーの役割〉を割り当てていた。自分にできること、できないことを客観的に評価し、メンバーに対して、グループ内における発言や態度の影響力による序列をつけていた。また、グループ内で自分より〈優秀な学生に助けってもらえる安心感〉を得て、自分の役割を確認することで、メンバーの役割を受け入れていた。『メンバーの役割を受け入れる』は、互いに相手が期待した通りの役割を果たすことが前提である。つまり、学生は、他者との関係において、様々な異なった役割に置かれ、それを受容しながら相互作用を育んでいったのではないかと推測される。ブルーマーは、人間の行為とは、その最中に行為自体が作り出され、行為者の役割を取得し、彼らの活動の枠組みに入り込むことが重要であると述べている¹⁰⁾。これは、本研究結果からも同様のことが言える。学生は、実習グループ内における学生間関係とその遂行の仕方に応じて、自分の役割を瞬時にとらえ、実習グループにおいて期待通りの役割を果たしていくという高い適応性があることが推測された。

4つ目の段階として、学生は期待した役割を果たしていく中で、互いに相手の存在を認めあい『メンバーが助け合う仲間になる』に至った。つまり、互いの存在を大切に思うことで、グループ内での信頼関係が生まれ、助け合いができるようになった。さらに実習上の助け合いだけでなく、困りごとの相談、気持ちの共有なども行われるようになっていった。この助け合いは、情報・知識・アイデア・個人的な

相談のシェア，支えること，努力・勇気などの共感であり^{6,7)}，ケアリング行為であるともいえる。

以上より，看護学生の実習グループメンバーと関係性を構築していくプロセスは，メンバーへの適切な気づかいと役割を期待通り果たすことで【グループ内での自分の居場所を獲得する】プロセスであった。

2. 学生支援への示唆

本研究結果から，【グループ内での自分の居場所を獲得する】ことによる実習グループ内での人間関係が構築されていくプロセスを確認することができた。まず，最初の段階の『メンバーとの距離を縮める』状況をできるだけ短期間にすることができれば，第2段階において，適切な気づかいをすることができ，実習早期に『メンバーの特徴を知る』ことができていた。メンバーの特徴が早期にわかることで第3段階の『メンバーの役割を受け入れる』，第4段階の『メンバーが助け合う仲間になる』へと進むことができた。実習早期に良好な関係性が構築できることが推測された。

その理由として，最初の段階に時間を要すると，〈いつもの自分を出さないように気をつける〉期間が長引き，緊張状態が続く。相手の行動から自分の行動を適応させることができず¹⁰⁾，互いに期待した役割を果たせないことで助け合う仲間には到達しない可能性がある。さらに実習グループは，教員やその他の医療スタッフによって評価されるものの集まりである。メンバー間の関係性が適切に築かれていない場合は，複雑な人間関係が織りなす現象の中で学生にとっては困難を伴う場合があり¹⁾，『メンバーとの嫌な関係』に至る可能性があり，実習意欲の低下につながると推測される。

以上のことより，教員は，日々のカンファレンスなどの様子から，学生の発言の量や内容，全体の雰囲気などから，関係性構築のどの段階にあるのか判断することが重要である。学生間の気づかいの状態から，強い特徴を持った学生の存在やグループ内における発言や態度の影響による序列などに目を向け，必要時にはカンファレンス時に学生への声掛けをし，グループの雰囲気を和ますような支援も必要がある。またグループ内の役割が明確でない場合は，

教員が介入し役割の調整をすることも必要であると考ええる。学生個々にあった役割を調整することで実習早期に関係性の構築が可能になると考えられた。

VI. 結論

看護学生が実習グループメンバーとの関係性の構築は【グループ内での自分の居場所を獲得する】プロセスであった。〈メンバーとの距離を縮める〉ことから始まり〈メンバーの特徴知る〉ことで〈メンバーの役割を受け入れる〉。互いに役割が果たせることで信頼関係を築き，〈助け合う仲間になって〉いった。一方信頼関係を築けなかった場合は〈メンバーとの嫌な関係〉に至った。以上4段階のプロセスが抽出された。

本研究の限界

本研究は11事例という限られた参加者の中で理論的サンプリングを行った。11名の参加者は自発的に研究参加を希望したという特徴があり理論的サンプリングが十分とは言えない。また，学生の大学生活上のメンバーとの関係性が今回のインタビューに影響をおよぼしていた可能性も否定できないためデータに偏りがある可能性がある。今後，データ数を増やし，研究を重ねていく必要があると考える。

本研究は，平成26～28年度科学研究費助成事業 学術研究助成基金助成金（基盤研究費C）の助成を受けた。（研究課題番号2643269）

文献

- 1) 杉森みど里，舟島なをみ：看護教育学 第5版増補版，医学書院，東京，260-276，2014
- 2) 濱口瑠美，駿河絵理子，中村雅子：看護学生の実習における感情労働場面での対応の実態とストレスコーピングの検討，第41回日本看護学会論文集看護教育，272-275，2010
- 3) 清野たか枝：看護学生が臨地実習グループで体験したこと—フォーカスグループインタビュー法を用いて—，第42回日本看護学会論文集看護教育，34-37，2012
- 4) 前田勇子，弓場紀子：臨地実習グループに対する肯定的な認識に関わる要因 編成後の経過に

- おける特徴, 大阪市立大学看護短期大学紀要, 3: 37-43, 2001
- 5) 山田亜美, 小田朋子, 松本文美, 處千恵美: 領域別看護学実習におけるグループ学習の形態が学生におよぼす影響について (第1報) 固定グループで実習をした学生を対象に, 三育学院大学紀要, 8(1): 17-26, 2016
- 6) Lin K, Shen Y: The nursing students' attitude toward using blogs in a nursing clinical practicum in Taiwan: A3-R framework, Nurse Educ. Today, 33 (9) : 1079-1082, 2013
- 7) Hughes L: Peer group interactions and the student perceived for caring, J Nurse Educ, 32(2): 78-83, 1993
- 8) Kuo C, Turton MA, Lee-Hsieh J, Tseng H, Hsu C: Measuring peer caring behaviors of nursing students: Scale development, Int J Nurs Stud, 44: 93-104, 2007
- 9) Begum S, Slavin H: Perceptions of "Caring" in nursing education by Pakistani nursing students: An exploratory study, Nurse Educ. Today, 32: 332-336, 2012
- 10) Blumer H: Symbolic interactionism: Perspective and method, Prentice-Hall, New Jersey, 1969(後藤将之: シンボリック相互作用論 パースペクティブと方法, 勁草書房, 東京, 124-141, 1991)
- 11) 木下康仁: グラウンデッド・セオリー・アプローチの実践 質的研究への誘い, 弘文堂, 東京, 2003
- 12) 森岡清美, 望月嵩: 新しい家族社会学 四訂版, 培風館, 東京, 102, 1997